

部活動への適応感に対する部員の対人行動と 主将のリーダーシップの関係

吉 村 齊*

本研究は、対人行動の特性として、特定の友達同士で形成された小集団を優先し、他の小集団のメンバーに対して閉鎖的になる態度（以下「小集団閉鎖性」と略記）に注目し、部活動への適応感に対する小集団閉鎖性と主将のリーダーシップの関係を検討した。調査対象者は304名の中学運動部員1年生で、質問紙法によって調査が実施された。まず、予め分類された主将のリーダーシップの中から、競技に関する技術や集団の人間関係の調整、部の規則などを熱心かつ厳しく指導する圧力H－積極的指導群、熱心に指導するが厳しくない圧力L－積極的指導群が抽出された。この2群による部活動への適応感の違いと小集団閉鎖性の関係を検討すると、小集団閉鎖性が強い部員において、圧力H－積極的指導群が圧力L－積極的指導群より、部活動への積極的行動得点が高かった。このことは、部の雰囲気への満足においても認められた。つまり、主将から熱心かつ厳しく指導されることによって、部員の意識が小集団から練習課題に向けられ、積極的に取り組むようになること、その際に他の部員と一緒に達成感を味わうことによって部員との関係も良好になっていくためであることが考えられた。

キーワード：対人行動、リーダーシップ、運動部、適応感、中学生

問 題

部活動を退部する主な理由として、人間関係や部活動への不満、消極性が男女間で共通していた（青木, 1989）。部活動を継続するためには、対人行動を通じた集団への満足と積極的な行動が求められるといえる。部は複数の友人集団から構成される場合が多い。部を公式的な内集団とすれば、友人集団は帰属したいメンバーが集まった小集団であることから、非公式の内集団といえる。しかし、小集団の内集団バイアスがあまりに強く、他の小集団のメンバーとのつきあいが制限されれば、部全体としての凝集性が弱くなる。本研究では、対人行動の特性として、特定の友人同士による小集団を優先し、他の小集団のメンバーに対して閉鎖的になる態度（以下「小集団閉鎖性」と略記）と部活動への適応感の関係を検討することとする。

中学生になると、人格的なつながりを重視した友人関係が展開されると同時に、対人的な要因によって孤独感を感じることも、落合（1998）より示唆されている。そのため、自己より友人との関係を優先する生徒も少なくないだろう。中学生が小集団を中心に仲間関係を展開することは当然といえる。落合・佐藤（1996）では、中学生の友人とのつきあい方で同調得点が高

かった。友人関係が崩壊しないように友人に同調するなど、内面的に気遣いながら、表面的には一緒にいることも示唆される。こうした群れ志向が強いと、小集団内の関係維持を優先するあまり、他の小集団のメンバーとのかかわりが減少する。それゆえ、全体の人間関係が分裂する恐れもある。石井（2000）は、モラルが高い集団の特徴の1つに、内部の人間関係に分裂がないことを挙げていた。つまり、部員の小集団閉鎖性が強いと、部全体の統率が困難となり、集団士気の低下が懸念される。勝敗に直接かわる運動部にとって、小集団間の調和は重要な課題といえる。部活動に適応するためには、小集団も部全体も大切にしたい仲間関係が求められるのである。以上のことから、本研究では、小集団閉鎖性を「内面的に気遣いながらも、小集団内の共行動を優先し、他の小集団のメンバーと積極的につきあおうとしない態度」と定義して検討を進める。

さて、職場集団ではリーダーとの関係が成員の満足度を規定する場合が数多くあり、Graen & Ginsburgh（1977）など、それを支持する研究もある。部活動への適応に対しても、主将との関係は無視することのできない要因と考えられる。そのリーダーとの関係がフォロアーの個人特性によって変化することは、部活動においても検討されてきた。例えば、坂西（1989）によると、社会的外向性の強い部員は、集団維持を配慮する主将に対して従順であった。吉村（1997）では、自己表

* 高知学園短期大学 〒780-0955 高知市旭天神町292-26
hyoshimura@kochi-gc.ac.jp

現・主張が高い部員は主将への満足だけでなく、部員との関係や活動への満足、さらに具体的行動・意欲も高かった。つまり、主将との良好な関係は、部員の集団適応や行動意欲に対して正の効果を及ぼすことが示唆される。逆に、主将に不満を抱く関係は適応感全体に対しても負の効果を及ぼすこととなる。それゆえ、部員は主将とのかかわりを避け、特定の部員同士による小集団を重視し、他の部員に対して閉鎖的な態度をとるのだろうか。あるいは、小集団閉鎖性が強いから、主将との関係を避け、満足できないのかもしれない。小集団閉鎖性が強い部員の適応感に対する主将のリーダーシップの影響は、弱い部員に比べて少ないことも考えられる。因果関係の特定はできないが、リーダーシップ効果を左右する部員側の要因として小集団閉鎖性も含まれることが考えられるのである。

しかし、小集団閉鎖性と主将のリーダーシップ効果の関係は不明な部分が多い。小集団を形成しやすい中学生にとって、小集団閉鎖性は身近な特性であると思われる。部員が集団に適応する上で、主将のリーダーシップから受ける影響は大きい。それゆえ、部活動における両者の関係を明らかにすることは、適応感を高める上での部員の自治的な活動や主将のリーダーシップを生かす指導方法を考える手掛かりが得られると期待できる。そこで、本研究では、部活動への適応感として、主将、部活動への満足、および積極的行動を取り上げ、中学1年生を対象に、部活動への適応感を規定する要因としての小集団閉鎖性と主将のリーダーシップの関係を検討することとする。

では、両者の関係を詳しく考察する。特別活動では、集団活動を通して自分と他者の力量とのギャップを自覚し、それによって自己理解を深化させ、自己形成の目標を修正し、確立することにつながるとともに、そのための活動をいっそう促進する意欲を生み出す(菊地, 1993)。この啓発的経験は、小集団内を中心に、他の小集団のメンバーともかかわることによって、いっそう高次のものになると推測される。その結果、自己形成に有意義な活動を経験し、課題を自覚することによって、さらに積極的に部活動へ取り組むだろう。また、自己の目標を形成し、修正することによって、具体的、現実的な達成感を抱き、部活動への満足も高まることが予想される。しかし、小集団閉鎖性が強いことは、小集団以外のメンバーとのかかわりを避けることにつながる。それゆえ、啓発的経験の機会は小集団内に限定されやすい。自己の目標の形成・修正が不十分となり、強い意欲も生み出されないことが予想され

る。こうした事態を防ぐ1つの方法として、主将のリーダーシップの介入が求められると考えられる。

従来のリーダーシップに関する研究には、主将の行動が部員への効果を規定することを示唆するものが多数ある。とりわけ、主将の熱心な技術指導と集団内の人間関係の維持が重要なのは明らかである。野上(1997)によると、大学1年生に対する主将の集団維持機能は正の効果が、主将の圧力Pは負の効果が現れやすかった。圧力Pとは、生産性を強調し、規則に従わせる機能である(山田, 1987)。発達段階や学校種の違いはあるものの、集団維持を強く配慮し、圧力Pに関する要因が弱い主将の行動は1年生部員に対して正の効果が予想される。他方、部員の個人特性に注目した坂西(1989)では、社会的外向の弱い部員は集団維持を配慮する主将に従順でなかった。小集団閉鎖性が強い部員も小集団以外の仲間とのつきあいに消極的である。それゆえ、集団維持を配慮されることをかえって煩わしく捉えたとすれば、小集団閉鎖性の程度に応じて、リーダーシップ効果は異なることが考えられる。

松永(1983)によると、仲のよい友達の退部を理由に自分も退部する割合は少ない。小集団内の関係のみが部活動への参加を直接規定することは少ないと考えられる。部活動には自らの関心を追求するために参加することから、部員は技術向上への成長欲求を抱いているのだろう。小集団閉鎖性の強い部員が部全体の友好的関係より、活動でのかかわりを重視しているとすれば、主将の熱心な指導によって、自らの成長欲求を充足しやすい点で、適応感が高まることが予想される。

ただし、集団士気を高めるためには、小集団間の調和も重要であることが、石井(2000)より示唆された。Locke & Latham(1990)によると、成員は集団が具体的な目標を持っている場合に生産的である。例えば、部の規則に従い、部員一体となって練習に励むことで、部への所属意識を高めるだろう。同時に、個人の関心とは異なる部全体による新たな充足感や達成感を体験できることが期待される。リーダーの圧力的要因は成員に心理的抵抗感を与える(山田, 1987)。しかし、部活動の場合、指導がよく行われていれば、管理的な面が強くても、主将に対する不満は小さい(坂西, 1989)。すなわち、小集団閉鎖性が強い部員は、技術や人間関係調整の指導に熱心で規則に従わせるような圧力も強い主将のもとの方が、指導に熱心で圧力は弱い主将のもとに比べると、連帯感を強めながら練習に励むだろう。その際、自己と部全体の成長過程を自覚できれば、その充足感や達成感を通して、部活動や主将の指導に

いっそう満足することが予想される。さらに、新たな目標や課題克服の目標を形成、修正することによって、より積極的に行動するだろう。

一方、小集団閉鎖性が弱い部員は、強い部員に比べると、周囲の人間関係の調和を大切にしながら、活動に励むと思われる。特に1年生は主将の指示を優先して従いやすい(坂西, 1989)。主将や部員との関係を配慮すると思われる彼/彼女らは、主将が熱心に指導すれば、圧力の強弱に関係なく、積極的に行動するだろう。そこで、より具体的な自己の目標や課題に気づき、修正を図ることが可能となる。その過程で自己の成長を自覚することは、競技に対する達成感や充足感の体験につながる。したがって、主将の指導が熱心な場合、圧力の強弱に関係なく、小集団閉鎖性が弱い部員の適応感が高いと予想される。

ところで、運動部は競技別に構成されることから、基本的に同性による集団となる。青年前期は、孤独を避けるために1つの友達集団に向かう(コールマン・ヘンドリー, 2003)。程度の差はあれ、小集団閉鎖性は男女に共通することが、落合(1998)などからも推測される。ただし、同性の友人関係の展開は男女間で異なる。和田(1996)によると、青年期の男子は同性友人に共行動を、女子は自己開示を期待しやすかった。例えば、スポーツについて話すことは男子の特徴である(Aries & Johnson, 1983)。それゆえ、同じ運動部に所属する男子同士は、競技を通じて友人関係を発展させていくことが予想される。他方、女子同士は、競技以外の共通性もち、自己開示しあえる友人との関係を重視するだろう。青年女子の友人との活動は、親密確認活動から閉鎖的活動へ変化することから(榎本, 1999)、中学入学以降、小集団閉鎖性の影響は、男子より女子において強くなると考えられる。

発達の観点からも、幼児期で勢力者が存在し、追従者が順序づけられている傾向にあるのは男児であった(齊藤・木下・朝生, 1986)。小学高学年でも第三者を取り込んだ親密な三者関係へと発展しやすいのは男子であった(Eder & Hallinan, 1978)。中学生では、男子の集団は中心と周辺が明確で多くのメンバーが何らかのつながりをもっていた(楠見, 1986)。以上の傾向は女子には見られなかった。このように、男子は幼児期からリーダーを中心に、外に開かれた流動性のある仲間関係を経験しやすいのに対して、女子は情緒で結びついた、狭いが深い友人関係の経験を積み、リーダーを中心とした集団組織の経験は浅いことが示唆される。それゆえ、女子部員は、男子部員に比べると、中学の部活動

で本格化する追従的な人間関係に馴染めず、戸惑いやすいだろう。とりわけ、特定の友人とのつきあいを優先しがちな小集団閉鎖性の強い女子部員は、この傾向が顕著であると推測される。ただし、女子には指導者がやらせればやる行動特性がみられるなど(石井, 1986)、主将への依存が示唆されることから、熱心で圧力が強い指導によって積極的に取り組むだろう。つまり、これまでに予想された小集団閉鎖性とリーダーシップの関係は女子にあてはまることが予想される。したがって、本研究では、次の結果を予想して吟味することとする。

仮説：小集団閉鎖性が強い女子部員は、主将の熱心で圧力が弱い指導より、熱心で圧力が強い指導を行う主将のもとで部活動や主将の指導に満足するとともに、積極的に行動する。

方 法

調査対象者

A・B両県内の公立中学校4校の1年生運動部員304名(男子183名, 女子121名)であった。この中に主将を務めている部員はいなかった。

手 続

本研究では、主将のリーダーシップ尺度、小集団閉鎖性尺度、部活動への適応感尺度を用いた。

1. 主将のリーダーシップ尺度の作成 主将を取り上げた坂西(1989)、吉村(1997)のリーダーシップ測定尺度を参考に、技術指導、人間関係調整、圧力などに関する24項目を作成した。ところで、Malle & Knobe(1997)より、部員と主将でリーダーシップの帰属が異なることが示唆される。帰属が異なれば、それによって生ずる行動も異なる(Nasby, Hayden, & DePaulo, 1980)。リーダーシップ効果は、部員の解釈によっても成立するのである。リーダーの自己評定が客観性に乏しいことも考慮して(Schriesheim, Kinicki, & Schriesheim, 1979)、本研究では、リーダーシップの測定を部員による評定とした。

2. 小集団閉鎖性尺度の作成 友達とのつきあい方(落合・佐藤, 1996)、友人関係の活動的側面(榎本, 1999)などを参考に、相互交渉、拒否、同調に関する項目を作成した。ただし、群れ志向より、行動に関する質問のみでは内省を歪める恐れがある。そこで、仲間交渉が特定の友達に限定され、その友達に同調し、それ以外の人を回避しようと意識したり行動する内容を表す10項目を作成した。

3. 部活動への適応感尺度の作成 本研究では、適

応を主将や部活動への満足、積極的行動と捉えている。そこで、吉村(1997)の満足度測定尺度と具体的行動・意欲測定尺度の中から、部活動への積極的行動、主将への満足、部の活動や部員相互の人間関係への満足に関する質問項目を参考に、23項目作成した。

1.～3.の全項目を「全然あてはまらない・1点」,「あてはまらない・2点」,「あまりあてはまらない・3点」,「ややあてはまる・4点」,「あてはまる・5点」,「たいへんよくあてはまる・6点」の6点法で回答させた。

調査の実施

部活動は夏休み以降、活動の中心が2年生に移っていく。そのため、主将も2年生に交替することから、1年生部員が新主将のリーダーシップを適切に評価できる時期を選ばなければならない。そこで、秋の新人戦が終了した2002年11月に調査を実施した。ホームルームなどの時間を利用して、担任教師によって無記名回答の集団調査が実施された。担任教師には、調査の実施直前に、教員は調査票を見ないし、個人の結果も現れないこと、本研究の結果が本格的に部活動の指導に生かされるのは卒業後になることを告げてもらった。これは、生徒が調査結果によって自分達の今後の生活に不利な影響を受けることを案じ、回答内容が歪

められることを避けるためである。

結 果

尺度の分析

仮説の検討を行う前に、本研究で使用する尺度の妥当性と信頼性およびそれらに関する検討を行った。なお、本研究の統計解析はSTATISTICA 2000とSPSS 11.0Jを用いた。

1. リーダーシップ尺度の分析

(1) 内容的妥当性の検討 作成された24項目が主将のリーダーシップを測定する上で妥当か否かを検討するために、運動部の顧問教師3名(指導歴15, 18, 20年)に検討を依頼した。具体的には、24項目を「主将が果たすべき指導的役割にあてはまる(リーダーシップ)」,「リーダーシップにあてはまらない」,「どちらにあてはまるかわからない」に分類してもらった。なお、特定の評定者の特異な基準に基づいた判断を除外することを配慮して、3人中2人以上で「リーダーシップ」と判断された20項目を尺度項目として採用した。

(2) 因子分析 リーダーシップ尺度を構成する因子を検討するために、20項目について因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行い、TABLE 1の4因子解を得た。回転後の因子負荷量がいずれか一方の因子に対し

TABLE 1 主将のリーダーシップ尺度のプロマックス回転後の因子負荷量

リーダーシップ尺度の項目	因 子				h ²
	I	II	III	IV	
技術やコツを上手に教える	.99	-.12	-.08	-.01	.62
練習の時は主将が自分からお手本を見せて指導する	.78	.20	-.15	.04	.49
失敗した時等、失敗した人を責めるのではなく技術について注意を与える	.51	.04	.18	-.07	.42
部員みんなができるような計画を立てる	.47	.14	.13	.08	.61
部の目標を中心となって立てる	.47	-.06	.21	.03	.47
反省したことは次に生かすように指導する	.46	.21	.09	.10	.60
練習の内容や計画を部員が分かるように教える	.43	.04	.31	-.07	.55
部員全員が馴染めるような雰囲気を作る努力をしている	-.05	.90	.05	-.07	.64
部員の悩みには親切に相談に乗ってくれる	.03	.78	-.07	-.04	.52
失敗した時など冗談を言ったりしてみんなを励ます	.03	.73	-.16	-.04	.45
よいプレーをしたり、いい結果が出たらほめる	-.06	.61	-.05	.10	.45
気まずい雰囲気があると解きほぐす	.14	.55	.12	-.03	.51
部全体をうまくまとめる	-.03	.02	.87	-.02	.65
みんなで外出する時は中心になってみんなをまとめる	-.06	-.02	.82	-.09	.62
競技についてよく知っているし上手だ	.08	-.11	.80	-.08	.53
練習中の服装が部活に相応しくなければ厳しく注意する	-.07	.05	-.14	.88	.53
練習に遅れたり黙って休んだら厳しく注意する	.06	-.10	-.12	.76	.46
厳しく命令したり注意したりする	.09	-.28	.18	.48	.32
先輩に対する態度を指導する	-.07	.05	.08	.46	.29
練習態度が悪い時には注意する	-.09	.18	.30	.42	.46
因子間相関					
	II	.58			
	III	.67	.60		
	IV	.42	.40	.42	

TABLE 2 小集団閉鎖性尺度の項目一全体相関

小集団閉鎖性尺度の項目	項目一全体相関
たくさんの友達を作るより仲のいい同じ友達と一緒にいる方が好きだ	.49**
クラスやクラブなど大きな集団より仲のいい同じ友達とのつきあいが大切だ	.47**
友達と意見が違った時、仲間外れにされたくないので友達に合わせる	.46**
仲のいい友達と遊んでいる所へ普段一緒に遊ばない人が来ると邪魔だと思う	.42**
休み時間や放課後は決まって同じ友達と一緒に過ごす	.38**
スポーツ大会に出るチームを作るとしたら上手な人より仲のいい友達をメンバーを選ぶ	.37**
トイレに行く時同じ友達を誘う	.34**
仲のいい友達同士が喧嘩をしないように気をつけている	.33**

** $p < .01$

て.40以上を示した項目を尺度得点の算出として採用した。因子間相関は.40～.67に分布していた。第1因子は、競技についての技術やその指導に関する7項目であったことから、「技術指導」と命名した。第2因子は、部内の人間関係の調整に関する5項目であったことから、「人間関係調整」と命名した。第3因子は、部を統率する内容にかかわる3項目であったことから、「統率」と命名した。第4因子は、規則に従わせ、真剣に練習させる指導にかかわる5項目であったことから、「圧力」と命名した。

(3) 各因子尺度の信頼性の検討 まず、各因子尺度についてCronbachの α 係数を算出したところ、技術指導が.87、人間関係調整が.84、統率が.84、権威が.75であった。次に、尺度の安定性を調べるために、調査対象者から無作為に抽出した81名に対して、3週間の期間をおいて二度の評定を実施した。そして1回目と2回目の各因子尺度の平均値を求め、両者の相関係数を算出すると、それぞれ.81、.85、.84、.86であった。 α 係数、安定性の検討より、各因子尺度の信頼性は保たれていると思われる。

2. 小集団閉鎖性尺度の分析

(1) 信頼性の検討 まず、10項目がどの程度一貫性をもって測定しているかをみるために、各項目得点とそれ以外の項目全体の合計得点との相関係数を算出した。その中で2項目が有意でなかったことから、残りの8項目について改めて項目一全体相関を算出すると.33～.49の有意な範囲に分布していた(TABLE 2)。8項目のCronbachの α 係数は.71であった。次に、調査対象者の中から無作為に抽出した127名に対して、3週間の期間をおいて二度の評定を実施した。8項目の項目あたりの平均値を尺度得点とし、1回目と2回目の相関係数を算出すると.84であった。項目一全体相関、 α 係数、安定性より、この8項目を小集団閉鎖性尺度として採用することとした。

(2) 構成概念妥当性の検討 構成概念妥当性を検討

するために、本尺度得点とエゴグラム(CP, AC)各得点、Yamaguchi, Kuhlman, & Sugimori (1995)の集団主義尺度(改訂版)得点、YG性格検査のS(社会的外向)得点それぞれとの相関係数を算出した¹。

まず、CP得点が低い人は他者を批判しない点で友好的であるが、責任感や倫理観に乏しく、AC得点が高い人は他人に依存し、周囲に合わせようとしすぎる傾向にある(佐々木, 2002)。つまり、他者に同調し、気を遣いやすい内容を含む本尺度得点が高い人は、CPが低く、ACが高いだろう。そこで、CPは94名を、ACは35名を対象に調査を行うと、本尺度とCPは負の相関が($r = -.27, p < .01$)、ACとは正の相関が認められた($r = .41, p < .05$)。

次に、集団主義尺度は個人の目的よりも集団の目的を優先することの測定を目的としている。とりわけ友人集団に重点が置かれ、本尺度と正の相関が予想される。そこで、136名を対象に調査を行うと、本尺度得点は集団主義得点との間に正の相関が認められた($r = .37, p < .01$)。

さらに、S得点が高い人は対人的に外向的で社会的接触を好む傾向が強い(八木, 1987)。つまり、多くの人と積極的に親しくしようとしている点で本尺度とは負の相関が予想される。164名を対象に調査を実施した結果、本尺度とS得点の間には負の相関が認められた($r = -.22, p < .01$)。

以上のことから、本尺度得点が高い人は、友好的であるが依存的でもあること、友人集団を優先しやすいこと、対人交渉に積極的でないことが示唆された。したがって、周囲に合わせることで友人関係を維持する

¹ 構成概念妥当性に関する調査は、すべて本研究の対象者と異なる中学運動部員1年生を対象とした。部活動への適応感尺度で取り上げた学校生活適応感も同様であった。調査時期は、CP、集団主義、S、学校生活適応感との関係が2002年11月、ACとの関係が2002年12月であった。いずれも本調査と同様に、担任教師によって実施された。

など、内面的に気遣いながら小集団を優先し、それ以外の仲間とのつきあいが消極的である点について構成概念妥当性を有すると判断された。

3. 部活動への適応感尺度の分析

(1) 因子分析 部活動への適応感を構成する因子を検討するため、23項目についての因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行い、3因子解を得た。回転後の因子負荷量がいずれか一方の因子に対して.40以上を示した20項目を尺度得点の算出として採用し、再度因子分析を行った結果がTABLE 3である。因子間相関は.43～.64であった。第1因子は、部活動への積極的行動に関する10項目であることから、「部活動への積極的行動」と命名した。第2因子は、主将の指導への満足感にかかわる5項目であることから、「主将のリーダーシップへの満足」と命名した。第3因子は、部活動の仲間関係や部内の雰囲気への満足にかかわる5項目であることから、「部の雰囲気への満足」と命名した。

(2) 各因子尺度の構成概念妥当性の検討 作成された各因子尺度の構成概念妥当性を検討するために、学校生活適応感尺度(高瀬・内藤・浅川・古川, 1986)の特別活動への態度尺度との相関係数を求めた。この尺度は、一生懸命取り組み、そこでの活動に楽しさを感じるなど、適応を病理的でなく多面的に捉えている。特別活

動の中に部活動も含めて作成されていることから、各因子尺度得点は特別活動への態度尺度得点と正の相関関係が予想される。そこで、72名を対象に調査を行ったところ、部活動への積極的行動が $r=.72$ 、主将のリーダーシップへの満足が $r=.54$ 、部の雰囲気への満足が $r=.65$ と、特別活動への適応感との有意な正の相関が認められた(いずれも $p<.01$)。したがって、3つの尺度は部活動に対して熱心に取り組み、満足している点についての構成概念妥当性を有すると判断された。

(3) 各因子尺度の信頼性の検討 各因子尺度の信頼性を調べるためにCronbachの α 係数を求めた。その結果、部活動への積極的行動は $\alpha=.92$ 、主将のリーダーシップへの満足は $\alpha=.87$ 、部の雰囲気への満足は $\alpha=.80$ であった。次に尺度の安定性を検討するため、85名を対象に、3週間の期間において二度の評定を実施した。各因子の尺度得点は項目あたりの平均値を用いた。1回目と2回目の相関係数を算出したところ、それぞれ.86, .74, .85であった。 α 係数と安定性より、尺度の信頼性は保たれていると思われる。

リーダーシップの類型化

主将のリーダーシップを特徴的な群に分類する際、各因子についてどのような評定パターンが示されているのかを考慮した。本研究では、熱心に指導し圧力が

TABLE 3 部活動への適応感尺度のプロマックス回転後の因子負荷量

部活動への適応感尺度の項目	因子			h ²
	I	II	III	
辛い練習でも自分のために役立ちそうであれば積極的に練習している	.84	-.06	.02	.71
部員の誰よりも上手になろうと真剣に努力している	.84	.02	-.06	.69
放課後の練習以外にも自分のできる目標を立てて練習をしている	.83	-.08	-.14	.55
レギュラーとして活躍したいから一生懸命練習している	.80	-.04	-.08	.67
部活に関連したスポーツや催し物のテレビ番組を進んで見る	.76	-.15	-.04	.57
他の人の上手なプレーやフォームはよく注意し自分でもまねをしてみる	.69	-.03	-.07	.47
部活に関係する新しい知識や技術が得られる本・雑誌をよく読む	.67	-.05	-.13	.49
部活は自分の生活にとってなくてはならないものだ	.59	-.08	.23	.69
部活動には積極的に参加している	.54	.14	.26	.74
部活は楽しい	.49	.11	.36	.79
主将のもとで練習できることは嬉しい	.09	.93	-.10	.77
主将の指導に従えば自分も上手になると思う	.02	.89	-.07	.71
主将を目標に練習したいと思う	.03	.85	.10	.73
主将の行動や意見はいつも正しいと思う	-.22	.74	.07	.51
他の人に主将を代わってほしくない	-.10	.55	.02	.30
部員みんなと一緒にいると楽しい	-.05	-.05	.92	.70
自分の部はみんな仲がよくて明るい	-.14	.06	.88	.63
部活では部員みんなを信頼している	.04	.11	.68	.58
部活に来て居心地はよくない(逆転)	.12	-.18	.54	.43
自分の部はまとまりがない(逆転)	-.15	.02	.42	.29
因子間相関				
	II	.43		
	III	.64	.55	

強い主将と、熱心に指導し圧力が弱い主将の比較が中心的な課題となっている。すなわち、圧力も他の因子もすべて高い群と、圧力は低く他はすべて高い群を抽出しなければならない。そこで、4因子を説明変数としたクラスター分析(k-means法)を行った。各群が心理的に区別可能、解釈可能であること、想定した2群が含まれていることをもっとも重視して群の抽出を行い、次の特徴的な4群を選出した(TABLE 4)。第1群は、圧力のみが平均をやや上回り、他因子は平均より低かった。つまり、指導は熱心でないが、部員を厳しく管理していると思われる。そこで「圧力H—消極的指導群(N=125)」と命名した。第2群は、すべてにおいて平均を大きく上回っていることから、熱心で圧力が強い指導にもっとも近いと思われる。そこで「圧力H—積極的指導群(N=73)」と命名した。第3群は、逆にすべてが平均より著しく低いことから、リーダーシップを発揮できていないことを意味している。そこで「圧力L—消極的指導群(N=43)」と命名した。第4群は圧力のみが低く、他は平均を大きく上回っていることから、熱心に指導し圧力が弱い主将にもっとも近いと思われる。そこで「圧力L—積極的指導群(N=63)」と命名した。

以上の4群は、本研究で予め想定された2群が含まれていたこと、残りの2群も Lippitt & White (1943)の類型と類似しており、解釈可能であったことから、この4群をリーダーシップの類型として採用した。ただし、本研究の目的は圧力H—積極的指導群と圧力L

—積極的指導群の比較検討が中心であることから、最終的にはこの2群を分析の対象とした。

小集団閉鎖性の群化

分析の対象とされた136名各々の小集団閉鎖性尺度得点が、全対象者の平均値($M=3.57$, $SD=0.86$)より高いか低いかに応じて2群化した。平均以上の者は小集団を優先して閉鎖的になりやすいことを意味している。そこで、「小集団閉鎖性H群(N=69)」と命名した。一方、平均未満の者を「小集団閉鎖性L群(N=67)」と命名した。

部活動への適応感に対する部員の小集団閉鎖性と主将のリーダーシップの関係

仮説を検討するために、部活動への適応感の3因子尺度得点をそれぞれ従属変数とし、主将のリーダーシップ(2)×小集団閉鎖性(2)×性(2)の三要因分散分析を行った。下位検定は、有意水準を $\alpha=.05$ としてTukeyのHSD法を行った。各変数における平均値と標準偏差をTABLE 5に示した。

1. 部活動への積極的行動 分散分析の結果、リーダーシップの主効果、リーダーシップと小集団閉鎖性の交互作用が認められた($F=7.20$, $df=1/126$, $p<.01$, 圧力H—積極>圧力L—積極; $F=9.02$, $df=1/126$, $p<.01$)。交互作用の単純主効果の検定を行うと、小集団閉鎖性H群において圧力H—積極的指導群($M=4.98$)が圧力L—積極的指導群($M=4.05$)より有意に高かった($t=4.13$, $df=66$, $p<.01$)。一方、L群においてリーダーシップの違いは認められなかった(圧力H—積極: $M=4.53$, 圧力L—積極: $M=$

TABLE 4 リーダーシップ類型による各因子尺度得点の平均値と標準偏差

指導群	N	技術指導	人間関係調整	統 率	圧 力
圧力H—消極的	125	3.71(0.68)	3.65(0.77)	3.71(0.71)	3.58(0.65)
○圧力H—積極的	73	4.83(0.68)	4.66(0.84)	5.29(0.61)	4.60(0.63)
圧力L—消極的	43	2.36(0.87)	2.71(1.22)	1.91(0.79)	2.27(0.89)
○圧力L—積極的	63	4.51(0.67)	4.41(0.99)	5.41(0.53)	2.73(0.65)
平 均	304	3.96(1.06)	3.93(1.11)	4.20(1.37)	3.47(1.05)

() が標準偏差、以下のTABLEにおいて同じ

TABLE 5 部活動への適応感に対する各変数の平均および標準偏差

小集団閉鎖性 リーダーシップ 性(N)	H 群				L 群			
	圧力H—積極的		圧力L—積極的		圧力H—積極的		圧力L—積極的	
	男(17)	女(15)	男(11)	女(26)	男(29)	女(12)	男(10)	女(16)
部活動への積極 的行動	5.29 (0.21)	4.66 (0.23)	3.94 (0.28)	4.17 (0.17)	4.68 (0.16)	4.38 (0.25)	4.68 (0.28)	4.49 (0.23)
主将のリーダー シップへの満足	4.97 (0.18)	5.23 (0.19)	4.69 (0.22)	4.94 (0.14)	4.80 (0.14)	4.63 (0.21)	4.60 (0.23)	4.91 (0.18)
部の雰囲気への 満足	4.92 (0.24)	4.83 (0.56)	3.62 (0.30)	4.39 (0.20)	4.81 (0.18)	4.87 (0.29)	4.58 (0.31)	4.98 (0.25)

4.58)。

2. 主将のリーダーシップへの満足 分散分析の結果、いずれの有意差も認められなかった。

3. 部の雰囲気への満足 分散分析の結果、リーダーシップと小集団閉鎖性の両主効果が認められた ($F=6.56$, $df=1/128$, $p<.05$, 圧力H-積極>圧力L-積極; $F=4.16$, $df=1/128$, $p<.05$, L群>H群)。さらに、両者の交互作用も認められた ($F=4.91$, $df=1/128$, $p<.05$)。交互作用については、小集団閉鎖性H群において圧力H-積極的指導群 ($M=4.87$) が圧力L-積極的指導群 ($M=4.01$) より有意に高かった ($t=2.71$, $df=67$, $p<.01$)。一方、小集団閉鎖性L群においてリーダーシップの違いは認められなかった (圧力H-積極: $M=4.84$, 圧力L-積極: $M=4.78$)。

考 察

本研究では、中学運動部員1年生によるリーダーシップ評定と小集団閉鎖性の程度の違いによって、部活動への適応感の強さが異なるか否かを検討した。

本研究の仮説は、小集団閉鎖性が強い女子部員は、圧力L-積極的指導群より、圧力H-積極的指導群において部活動への適応感が高いというものであった。このことは、リーダーシップ、小集団閉鎖性、性の交互作用およびそれに関連した検討をすることで考察できる。ただし、性の主効果および性を含む交互作用はいずれも有意でなかった。たしかに小集団閉鎖性の影響は理論上女子が強いと思われるが、適応感に対してリーダーシップと小集団閉鎖性が影響を及ぼす様相は男女間で共通することを意味しているのかもしれない。以下では、得られた結果に基づいてリーダーシップと小集団閉鎖性の交互作用を中心に仮説の考察を進める。

本研究では、部活動への適応感が3因子に分類された。まず、部活動への積極的行動では、全体的に圧力H-積極的指導群が高かったが、リーダーシップと小集団閉鎖性の交互作用も認められた。すなわち、小集団閉鎖性H群においては圧力H-積極的指導群の積極的行動得点が高かった。一方、小集団閉鎖性L群でリーダーシップの違いは認められなかった。これより、小集団閉鎖性が強い部員に対して熱心に指導し、厳しく注意していくことは、部員の部活動への積極的行動を高めることを示唆するといえる。したがって、仮説は部活動への積極的行動に対するリーダーシップと小集団閉鎖性の関係について支持を得たと思われる。

本研究では、部員が成長欲求を抱いていることを前提に検討を進めた。たとえ強制的であったとしても、

主将からの熱心で厳格な指導によって、競技に対する達成感や充足感を体験するのだろうか。それゆえ、小集団内に向いていた意識が、積極的に練習することへ向かうことが予想される。しかし、成長欲求が比較的弱い場合、活動への取り組みが消極的なことから、今後の継続は厳しいことが、青木(1989)より予想される。主将のリーダーシップが小集団閉鎖性の強い部員に与える心理的影響を、成長欲求の程度と関連づけて追究することも課題である。

次に、主将のリーダーシップへの満足に関しては、リーダーシップと小集団閉鎖性の主効果も交互作用も認められなかった。すなわち、この因子尺度に関する仮説は支持を得られなかった。本研究で除外したリーダーシップの2群の満足が低いことは、Lippitt & White (1943) より当然であろう。熱心に指導する主将同士を比較したことから、満足に大きな違いが見られなかったのだろうか。逆に、新主将のリーダーシップそのものが発展途上のため、前主将と比較して否定的な判断を行うことも考えられる。あるいは、中学1年生は部活動を通して縦の仲間関係をはじめと本格的に体験する。特に、1年生は主将に従いやすいことから(坂西, 1989)、この時期は主将と距離をおいて対応していることが考えられる。主将と深くかかわる経験が乏しいために、小集団閉鎖性の強弱に関係なく、満足の違いがなかったのかもしれない。集団の構造は流動的なものであり、主将との関係のあり方も変化していく。積極的行動によって、主将への満足が今後高まることも予想される。対象者が進級した時や、同輩が主将になった時の評定を継続的に検討するなど、縦断的な考察や異なる時期との比較検討が課題といえる。

さて、部の雰囲気への満足に関しては、リーダーシップ、小集団閉鎖性の主効果、および両者の交互作用が認められた。とりわけ小集団閉鎖性H群における圧力L-積極的主将群の満足が、他群に比べて低かった。他方、小集団閉鎖性L群では、リーダーシップの違いが認められなかった。すなわち、部の雰囲気への満足に関する仮説はリーダーシップと小集団閉鎖性の関係について支持を得たと思われる。

部活動への積極的行動と同様、小集団閉鎖性が強い部員にとって、熱心で圧力が強い主将の指導が、小集団閉鎖性が強い部員の欲求を充足させ、満足を高めるのだろう。圧力が強い主将は部の規則に従わせることから、ともに練習に励む部の仲間と「われわれ意識」を共有しあい、満足も高くなることが考えられる。逆に、指導態度の圧力が弱い主将の場合、意識を部活動

の成長欲求の向上に向ける効果は弱かったことが示唆される。小集団閉鎖性が強い部員は、もともと主将とのかかわりが少ない上に、主将からの個々人に対する管理も弱いことから、主将との接触がいつそう少なくなる。例えば、この部員達が小集団内の友人を過度に気遣うことでストレスを感じてしまい、部の雰囲気そのものを否定的に捉えるとすれば、適応感を肯定的に捉えるような変化は生じにくいことが考えられる。小集団への満足度を含めた分析も今後の課題である。

以上のことから、小集団閉鎖性が強い部員は、圧力が強い主将の部において、部活動に対して積極的に行動し、部の雰囲気に対しても満足していることが示唆された。すなわち、本研究で得られた知見は、部員の小集団閉鎖性が強い場合、主将のリーダーシップを熱心で圧力が強い指導と帰属した部員は、圧力が弱いと帰属した部員に比べて、部活動への積極的行動が高いと自己評定していること、このことは小集団閉鎖性が弱い部員には見られないこと、以上のことは部の雰囲気への満足にもあてはまることを示唆していた。主将が熱心かつ厳格に指導することによって、小集団閉鎖性が強い部員の意識が友人集団から練習課題に向けられ、積極的に取り組むようになるのだろうか。それゆえ、競技の達成感や充足感を体験し、部員との関係や雰囲気を肯定しやすいことが考えられる。ただし、圧力のみが先行すれば負の効果をもたらすことは、Lippitt & White (1943) で既に示唆されている。管理の要因は、丁寧な指導を前提に正の効果をもたらす(坂西, 1989) からであろう。

なお、本研究の小集団閉鎖性の対象は部内の友達に限定されていない。調査後の仲間関係に支障を来すことがないよう配慮したためである。つまり、小集団閉鎖性が強いことが部の分裂を意味するわけではない。しかし、部外での小集団閉鎖性が強い傾向が部内に般化することは十分考えられる。他方、小集団の範囲の判断が個人によって異なったことは否めない。ソシオメトリックテストに基づいた測定を工夫して導入するなど、部の仲間関係の構造を含めた検討が望まれる。

本研究は、同一時期にすべて質問紙法で実施された。そのため、因果関係の考察に限界がある。因果関係を説明するためには、小集団閉鎖性の形成過程とリーダーシップの影響を縦断的に検討しなければならない。また、本研究で最終的に採用された尺度は、部活動への適応感を除いて逆転項目を含まないものであった。例えば、小集団閉鎖性尺度で作成された逆転項目は項目-全体相関係数が低く、削除された。対象者が回答

しづらい内容であったとすれば、内省可能性に課題が残されたといえる。尺度の項目-全体相関や α 係数も十分満足できる値ではなかった。性差や対象範囲が原因であろうか。あるいは、気遣い、小集団の優先、消極的な対人交渉を込みにして1つの尺度を作成したからかもしれない。以上の問題を克服するためには、項目数を増やした上で因子を抽出し類型化を行うことも一案だろう。尺度の検討も暫定的であることから、項目の表現の修正や逆転項目の追加だけでなく、妥当性と信頼性の検証を蓄積することによって、質的向上を図らなければならない。これは他の尺度も同様である。質問項目の内容も全体的に社会的望ましさの影響を受けやすいことから、特定の部員への観察や面接を通して追跡調査し、その結果と本研究の結果を比較するなど、多角的に追究することが今後の課題といえる。さらに、小集団閉鎖性は部活動に限定されるわけではない。学級集団などを含めた検討によって、青年期の仲間関係の特徴がより具体化されるだろう。

このように、本研究では未解決の問題が残されている。それでも、部活動におけるリーダーシップと小集団閉鎖性の重要性が示唆されたことは、現代青年の仲間関係の理解と豊かな集団活動の検討の発展に、新たな視点からの貢献が期待できると考えられる。

引用文献

- 青木邦男 1989 高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因 体育学研究, **34**, 89-100. (Aoki, K. 1989 Factors affecting senior high school athletes' keeping in or dropping out of their sport tram activities. *Research Journal of Physical Education*, **34**, 89-100.)
- Aries, E. J., & Johnson, F. L. 1983 Close friendship in adulthood : Conversational content between same-sex friends. *Sex Roles*, **12**, 1183-1196.
- 坂西友秀 1989 フォロアーのパーソナリティ特性の関数としてのリーダーシップ効果 教育心理学研究, **37**, 107-116. (Banzai, T. 1989 Leadership effects as a function of followers' personality characteristics. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **37**, 107-116.)
- コールマン, J.・ヘンドリー, L. 白井利明・若松養亮・杉村和美・小林 亮・柏尾真津子(訳) 2003 青年期の本質 ミネルヴァ書房 (Coleman, J., & Hendry, L. 1999 *The nature of adolescence*.

- London : Routledge.)
- Eder, D., & Hallinan, M. T. 1978 Sex differences in children's friendships. *American Sociological Review*, **43**, 237-250.
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, **47**, 180-190. (Enomoto, J. 1999 Socio-emotional development of friendship among adolescents : Activities with friends and the feeling for friends. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 180-190.)
- Graen, G., & Ginsburgh, S. 1977 Job resignation as a function of role orientation and leader acceptance : A longitudinal investigation of organizational assimilation. *Organizational Behavior and Human Performance*, **19**, 1-17.
- 石井源信 1986 Question 6 女子をコーチする時, 心理的な面で特に注意すべきことがありますか. 日本体育協会(編) 女子スポーツ・ハンドブック ぎょうせい Pp.16-17.
- 石井源信 2000 スポーツと集団力学 杉原 隆・船越正康・工藤孝幾・中込四郎(編) スポーツ心理学の世界 福村出版 Pp.165-181.
- 菊地則行 1993 啓発的経験と心理学 菊池武烈(編) 進路指導 中央法規出版 Pp.81-94.
- 楠見幸子 1986 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動, 学級雰囲気, 学校モラルに関する研究 教育心理学研究, **34**, 104-110. (Kusumi, S. 1986 The effects of patterns in a macroscopic sociometric structure on students' cognition of teachers' leadership behavior, class atmosphere and school morale in the classroom. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **34**, 104-110.)
- Lippitt, R., & White, R. K. 1943 The social climate of children's groups. In R. G. Barker, J. S. Kounin, & H. F. Wright (Eds.), *Child behavior and development*. New York : McGraw-Hill. Pp.485-508.
- Locke, E., & Latham, G. A. 1990 *A theory of goal setting and task performance*. Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice-Hall.
- Malle, B. F., & Knobe, J. 1997 Which behaviors do people explain ? A basic actor-observer asymmetry. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 288-304.
- 松永 渉 1983 部活動を途中でやめた生徒 モノグラフ・中学生の世界, **14**, 32-39.
- Nasby, W., Hayden, B., & DePaulo, B. M. 1980 Attributional bias among aggressive boys to interpret unambiguous social stimuli as displays of hostility. *Journal of Abnormal Psychology*, **89**, 459-468.
- 野上 真 1997 大学生運動部主将のリーダーシップ効果を規定する諸要因 実験社会心理学研究, **37**, 203-215. (Nogami, M. 1997 The effects of leader behavior and some moderators at sports clubs. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 203-215.)
- 落合良行(編) 1998 中学一年生の心理一心とからだのめざめー 大日本図書
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65. (Ochiai, Y., & Sato, Y. 1996 The developmental change of friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **44**, 55-65.)
- 斉藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ 1986 仲間関係 無藤 隆・内田伸子・斉藤こずゑ(編) 子ども時代を豊かに 学文社 Pp.59-111.
- 佐々木直 2002 エゴグラムの解釈 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会(編) 新版 TEG 解説とエゴグラム・パターン 金子書房 Pp.19-23.
- Schriesheim, C. A., Kinicki, A. J., & Schriesheim, J. F. 1979 The effect of leniency on leader behavior descriptions. *Organizational Behavior and Human Performance*, **23**, 1-29.
- 高瀬克義・内藤勇次・浅川潔司・古川雅文 1986 青年期の環境移行と適応過程(1)一質問紙の作成ー 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 556-557.
- 和田 実 1996 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, **67**, 232-237. (Wada, M. 1996 The relation of age, gender and sex-role identity to role expectation in same-sex friends. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 232-237.)
- 八木俊夫 1987 YG 性格検査ーYG テストの実務応用的診断法ー 日本心理技術研究所
- 山田淑子 1987 リーダーシップM・計画P・圧力P

行動が部下の満足感に及ぼす効果 実験社会心理学研究, **26**, 125-134. (Yamada, Y. 1987 Effects of planning, pressure, and group maintenance leadership on subordinates' satisfaction. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **26**, 125-134.)

Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M., & Sugimori, S. 1995 Personality correlations of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **26**, 658-672.

吉村 斉 1997 学校適応における部活動とその人間関係のあり方—自己表現・主張の重要性— 教育

心理学研究, **45**, 337-345. (Yoshimura, H. 1997 Human interactions in extracurricular athletic clubs in relation to school adjustment members: The importance of self-assertion. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 337-345.)

付 記

本研究は、日本学術振興会科学研究費・若手研究(B) (課題番号：14710111) の助成を受けて行われた。また、本研究の結果の一部は日本教育心理学会第45回総会にて発表された。

(2004.1.10 受稿, '04.12.11 受理)

Adjustment to Club Activities : Club Members' Interpersonal Behavior and Team Captains' Leadership Style

HITOSHI YOSHIMURA (KOCHI GAKUEN COLLEGE) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2005, 53, 151-161

The present study examined the relation between club members' exclusive attitudes toward other small group members and their captains' leadership style, with respect to the adjustment to activities in junior high school extracurricular athletic clubs. Participants, 304 seventh-grade students (183 boys, 121 girls) belonging to athletic clubs at 4 junior high schools, completed a questionnaire. The following results were obtained : When diligent captains were authoritarian, members who were exclusive to other small group members participated in the club activities more diligently than when diligent captains were non-authoritarian. In addition, members belonging to authoritarian clubs and who were exclusive to other small group members were more satisfied with the atmosphere in their clubs than were similarly exclusive youth belonging to non-authoritarian clubs. We conclude that the relation between club members' exclusive attitudes toward other small group members and their captains' leadership style had a great influence on members' adjustment to club activities.

Key Words : interpersonal behavior, leadership style, athletic club, adjustment, junior high school students